

白百合女子大学 博士論文審査報告書

氏 名	橋本 史帆
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	乙第 18 号
学位授与年月日	平成 29 年 1 月 12 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当者
学 位 論 文 名	主 題 トマス・ハーディの小説世界 副 題 登場人物たちに描き込まれた国際事情と「グレート・ブリテン島」的世界
論文審査委員	委員長 教 授 山本 真吾 主 査 教 授 荒木 正純 副 査 教 授 岩政 伸治 副 査 准教授 土井 良子 副 査 成城大学文芸学部准教授 木下 誠

論文内容の要旨

本論文は、19 世紀イギリスを代表する小説家・詩人トマス・ハーディ（Thomas Hardy）の長編小説 6 編と短編 2 編を対象に、そこに描かれた国内外のグローバルな事情を読み取り、彼がいかにイギリスと諸外国との関係をとらえていたかを追究するものである。本論文は序章と結章をのぞき 3 部 7 章からなり、構成は以下の通り。

第 1 部 登場人物たちとヨーロッパ諸国及びイギリス植民地

- 第 1 章 『狂乱の群れをはなれて』——バスシバの結婚とウェザベリ農場の行方
- 第 2 章 『ラッパ隊長』と「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」——外国兵たちの意味するもの
- 第 3 章 『日陰者ジュード』——ジュードとスーの「事実婚」を中心として

第 2 部 登場人物たちとイギリス

- 第 4 章 「運命と青いマント」——インド高等文官とオズワルド
- 第 5 章 『カスターブリッジの町長』——時代の変遷と町長の交代劇

第 3 部 登場人物たちにおける「グレート・ブリテン島」的世界

- 第 6 章 『帰郷』——クリムとユーテイシアのエグドン・ヒースへの回帰をめぐって
- 第 7 章 『ダーバヴィル家のテスト』——テストとエンジェルの和解

第 1 部では、対象とする作品で人物造型がいかになされているかを検討し、フランスを中心としたヨーロッパ諸国とイギリス植民地オーストラリアを、ハーディがどのように捉えていたかを析出している。第 1 章は『狂乱の群れをはなれて』（*Far from the Madding Crowd*, 1874）をとりあげ、舞台のウェザベリ（Weatherbury）の農場主バスシバ・エヴァディーン（Bathsheba Everdene）と、彼女を慕う羊飼いがイブリエル・オウク（Gabriel Oak）、農場主ウィリアム・ボールドウッド（William Boldwood）、さらにイギリス人兵士トロイ（Francis "Frank" Troy）が繰り広げる恋愛模様を分析した後、バスシバが結婚するフランス人の血をひくトロイに対し、ウェザベリの人々がいかなる反応を呈するかを検討し、そこで起きる人間ドラマは、ハーディが捉えていたイギリス人の対フランス意識を反映したものとしている。第 2 章は、ナポレオン戦争を背景にした『ラッパ隊長』（*The Trumpet-Major*, 1880）と「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」（“The Melancholy Hussar of the German Legion”, 1890）を対象に、ヨーロッパ各地からイングランドにやってきた外国人兵士たちと前者作品のイギリス人アン・ガーランド（Anne Garland）、そして後者作品のフィリス・グローヴ（Phyllis Grove）の描かれ方、さらに外国人兵士の出身国の事情を精査した後、外国人兵士とアン、あるいはフィリスとの係りについて考察し、イギリス社会には、対フランス

意識だけでなく、対外国への警戒心が強く存在していたとしている。第3章は『日陰者ジュード』(*Jude the Obscure*, 1895)を対象にし、ジュード・フォーレイ(Jude Fawley)とスー・ブライドヘッド(Sue Bridehead)の同棲婚、ジュードとアラベラ・ドン(Arabella Donn)の結婚と別離、さらにまたアラベラとカートレット(Cartlett)との結婚生活の実状を精査した後、イギリスとオーストラリアの間で展開される登場人物たちの出会いと別れの経緯を分析し、ハーディがイギリスとオーストラリアの共生の難しさを認めつつも、両国が相互に必要な不可欠な存在であるとみていたとしている。

第2部では、対象作品に読みとれるイギリスと植民地インドやカナダなどの諸外国との関係を分析し、ハーディがいかなるイギリス観を持っていたかを追究している。第4章は短編「運命と青いマント」(“Destiny and a Blue Cloak”, 1874)を対象にし、アガサ・ポリン(Agatha Pollin)の婚約者で庶民階級のオズワルド(Oswald Winwood)が合格したインド高等文官について考察した後、アガサと結婚を約したオズワルドではあったが一向にインドから戻ってこない理由と、2人の破局について言及しつつ、イギリスとインドの脆弱な関係性がこの作品の深層部に描き込まれているとしている。第5章は『カスターブリッジの町長』(*The Mayor of Casterbridge*, 1886)を取りあげ、カスターブリッジにおけるヘンチャード(Michael Henchard)、ファーフレイ(Donald Farfrae)、エリザベス=ジェイン(Elizabeth-Jane Newson)の3人の織りなす人生模様を検討した後、ヘンチャードが事業に失敗し町長を辞任したことや、彼にかわり町長になるファーフレイが社会的に成功したこと、その彼と結婚するエリザベス=ジェインの言動などを詳細に吟味し、これらのことが、イングランド、スコットランド、カナダという国内外の政治的・経済的・文化的力関係を表現したものと読み、この読みに基づき、ハーディが、カスターブリッジを介して「大英帝国」を作品にいかに描きこんでいるか、つまりスコットランドとカナダがイングランドを支える重要な地域であるとするハーディの国際理解が表出されているとしている。

第3部は、対象作品に見られる人物造型の分析を通じ、ハーディが「グレート・ブリテン島」をどのように捉え作品に反映させていたかを論述している。第6章は『帰郷』(*The Return of the Native*, 1878)の舞台エグドン(Egdon)村の有り方を、「グレート・ブリテン島」の歴史などに関係づけながら論じた後、エグドン住民でパリ生活に憧れるユーステイシア・ヴァイ(Eustacia Vye)とフランス帰りのクリム(Yeobright Clym)の2人が、近代文明の先端の地パリと未開の地エグドンとの大きな文化的間隙をいかに埋めていくかを明らかにし、それを基に、「グレート・ブリテン島」的世界が広がるエグドンには、失った人間性を回復させ再び人生をやり直すことを可能にする神秘的な力があるとするハーディの「グレート・ブリテン島」観を析出している。第7章は『ダーバヴィル家のテス』(*Tess of the d'Urbervilles*, 1891)を対象に、テスを取り巻く社会的環境とその人物像を「グレート・ブリテン島」との関わりから読みとっている。その後、テスと結婚したエンジェル(Angel Clare)が、彼女から結婚前に雇用主アレック・ダーバヴィル(Alec d'Urberville)との関係を告白されるや単身ブラジルに移住してしまう経緯を説明し、彼がその地で人間的に成長したことを論証している。この読みを基に、ハーディがどのようにブラジルと「グレート・ブリテン島」を捉えていたかを読み取り、外見も内面もテスに酷似した妹ライザ・ルーとエンジェルが結ばれるという結末は、イギリスに未だ残存する「グレート・ブリテン島」的世界の継承を望むハーディの願望の表明として読んでいる。

論文審査の結果の要旨

1 批評

従来のハーディ研究の主流は、ハーディが故郷イングランドのドーセット州とその周辺地域の町や村を舞台に設定し、その土地を「ウェセックス」と名付けて作品を生み出したことで、読みの焦点がイングランドに限定される傾向にあった。しかし、その比較的閉鎖的な土地社会に、インド、オーストラリア、ブラジル等の外国に移住や仕事のため出かけ、そこからまた戻ってくる人物が描かれることがある。また、その社会に外国人や外国人の血をひく人物もすくなくならず登

場する。本論文はこの事態に着目し、この事態がいかなる意味を作品世界にもたらすかを追究した力作である。それと並行して、舞台となる土地が有史以前イベリア半島から伝播した巨石文化の時代から、1066年のノルマン人の征服にいたるまでの歴史の舞台でもあったので、そのことが、そうした海外事情とどのように関係し、作品世界に影響を及ぼしているかをも追究した。本論文のとくに評価すべき点と望まれる点は、以下のようにまとめることができる。

〈評価すべき点〉

- ・本論文は、ハーディの「ウェセックス」を単に「イングランド」内部に位置づけるだけでなく、19世紀後半の「大英帝国」という空間的広がり、それにもなう人間やモノの移動、さらには慣習や文化などの伝播といったグローバルな現象の一部として議論した。また、宗主国イギリスとその植民地との主従関係だけでなく、イギリス・フランス・ドイツといったヨーロッパ列強間のライバル関係をも重視することで、帝国主義を踏まえた小説分析に厚みを与え、次世紀の世界大戦につながる19世紀帝国主義の問題点を鋭く突く作業でもあった。
 - ・大英帝国を背景とした作品と同時代的現象の空間的広がりを、太古の痕跡を残す「グレート・ブリテン島」という時間的広がりに関連づけている。グローバルな現象と人間個人の係りの中で翻弄され疲れ切った人物が、そうした太古の痕跡に触れることでその生命を回復する様を析出した。
 - ・本論文が「メトニミー的」として捉えた人物個人と外国、もしくは異郷の土地との関係性は、ハーディ研究では新鮮である。従来の研究では、例えば「森」の「メタファー性」などが主として追究されてきたからである。あるいは、ハーディの作品で描かれる悲劇は、国内の産業化・都市化・脱農村化といった社会の変化とその歪みとして解釈される傾向にあったが、国外との「メトニミー的」関係性に着目した本論文は、ハーディの作品世界としての「イングランド」が、いかにその空間的・時間的外部の世界によって規定されていたかを明らかにした。
- 以上のように優れた本論文ではあるが、望まれる点もないわけではない。

〈望まれる点〉

- ・本論文では、ハーディの作品そのものと、同時代の歴史的・外部資料を論文展開の両輪としたが、たとえばハーディの作品の多くは本になる以前に雑誌に掲載されていた。しかし、本論文では、そうした雑誌に掲載した他の作家の作品群や同時代の新聞報道などの多様な言説群とハーディ作品との関係性が視野に入っていない。ハーディ周辺の一次資料の精査が進展すれば、ハーディが時代の要請に応えたと思われる箇所や、他の作家とは異なる独特の反応などがさらに明確になるであろう。
- ・本論文は、各作品の分析がそれ自体で完結し、それぞれ相互の関係が考察されていない。著者のいう「メトニミー的関係」はどのように年代的に発展したかの追究がなされれば、『ダーバヴィル家のテス』や『日陰者ジュード』などの代表作の新たな位置付けが、本論独自の視点を通して可能になると思われる。
- ・本論文では、人物設定と物語の展開に議論を集中させることで大きい成果がえられたが、その反面、従来の研究で行われてきたハーディ独特の言葉遣い、比喩表現等の分析が文学研究としては不足している。こうした部分を補えば、本論はこれまでの国内空間にとらわれたハーディ解釈を全体的に読み替えるような（新たな視点を持ち込んだという評価にとどまらない）研究成果となるであろう。

とはいえ、以上のことは今後の研究課題としてよく、本論文が新たな知見をハーディ研究に加えたと判断できる。

2 最終試験

平成28年11月24日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

以上により、審査委員会は本論文が博士（文学）の授与に値するものと認めた。